2021 年 3 月 31 日

東京都知事 小池 百合子 殿
東京都議会議長 石川 良一 殿
東京都教育委員会教育長 藤田 裕司 殿
東京都建設局局長 中島 高志 殿
東京都公園審議会会長 髙梨 雅明 殿
西武鉄道株式会社代表取締役社長 喜多村 樹美男 殿

一般社団法人　日本建築学会関東支部
支部長　髙橋 徹

としまえん木馬の会事務所建物（旧「古城の食堂」）の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、昨夏に 90 年以上の歴史に幕を閉じた練馬区のとしまえん跡地について、東京都では、「都市計画練馬城趾公園」として整備計画を進め、素案を示しつつ、都民への意見募集も終了され、今後、5 月に答申を出される旨承知しておりますが、同地に遺されている、としまえん木馬の会事務所建物（旧「古城の食堂」、以下は「古城の食堂」と記す）については、審議会の議事録や整備計画の概要を示す書類において言及がなく、計画図にも描かれていないことから、解体を前提に進められていると拝察いたします。

豊島園は、都市郊外に発達した戦前の遊園地として我が国を代表する事例の一つです。商工業が著しく発達する近代社会では、都市に人口が流入することで、次第に環境の良い郊外が注目され、日本では明治末頃から私鉄の敷設を伴って行楽地や居住地として開発が促進されました。遊園地は、こうした一連の開発に先鞭を付けた存在で、郊外に居住する中流層を主な遊客にして、新しい時代の健全な都市文化を発信する場所（施設）として発達しました。日本ではいち早く都市化が進んだ大阪近郊で先行し、少女歌劇を擁する宝塚の施設が主導しますが、東京近郊では、豊島園をはじめ、田園調布の多摩川園や調布の京王閣多摩川原遊園が著名です。特に豊島園は、これを開いた実業家の藤田好三郎が郊外に遊ぶ意味を重視したことを反映して、園芸や体育、風致の維持を軸に設計されており、一つの典型と捉えられます。「古城の食堂」は、こうした豊島

園の理念に則って設計され、遅くとも本開園した 1927（昭和 2）年には建設されています。加えて、長引くデフレの影響で、戦前から続く老舗遊園地が次々と閉園に追い込まれている現況において、建設当時の様子をよく止めているこの建物は、郊外の開発や遊園地の歴史を証言する貴重な遺構と言えます。

また、豊島園の設計は、造園を欧米で学び、邦人初のランドスケープ・アーキテクトとして活躍した戸野琢磨（1891- 1985）によるものですが、当該の建物も戸野が関わって遊園地の造園と一体的に設計されたと考えられます。戸野はその後、国内外に多数の庭園を設計し、著名な建築家との協働も少なくありませんが、豊島園は戸野による国内での実施処女作であり、「古城の食堂」は、戸野が直接的に建築に関与したと考えられる数少ない事例として価値があります。

そして、この建物が立地する場所は、練馬城趾の遺構に至近ですが、戸野は、それを保全するに相応しい方法として、英国式の花園を設け、その添景となるように、英国の古城を模したこの建物を設けたとしています。即ち、その当時、歴史的風致を守ろうとした藤田や戸野らの意志を象徴する遺構と言えます。今回の整備計画でも、遊園地時代を含めて土地の歴史性を継承することを重視なさっていると承知しておりますが、そのご主旨を実現する上でも、不可欠な存在でしょう。東京都民に長年に渡って親しまれてきた場所の記憶を繋ぐ上でも同様と言えます。

構造は、当時の最新技術として関東大震災後に普及した鉄筋コンクリート造と見られます。英国風の古城を模しながらも、陸屋根や片持ち梁といった、この構造の特徴をよく示す手法を巧みに採り入れた設計であり、近代建築の事例としても希有な存在です。

こうした由緒や建築的特徴に基づく歴史的価値を有する「古城の食堂」の遺構を保存・活用することができれば、新しい公園における歴史性の継承に大きく貢献するだけでは無く、練馬区や東京都、さらには我が国の文化遺産の保存においても有意義と考えられます。何卒、より良い活用計画の策定をご検討下さいますよう、お願い申し上げる次第です。さらに、そのために不可欠と考えられる専門的な観点からの現況調査を実施されることを併せてお願い申しあげます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的並びに技術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2021 年 3 月 31 日

としまえん木馬の会事務所建物（旧「古城の食堂」）についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部
建築歴史・意匠専門研究委員会
主査 片山 伸也

1. 建築の概要

豊島園は、実業家で大川財閥の幾つもの企業で要職を務めた藤田好三郎によって、練馬城趾に開設された東京近郊の遊園地で、1926（大正 15）年 10 月 17 日に開園している。藤田は、この土地を購入後、子女と共に屡々この地に遊んでいたが、1923（大正 12）年 9 月 1 日に発生した関東大震災を契機に考え方を変え、この土地を公開して「衆と共に娯しむ」方針で豊島園を計画したとされる。「営利に走らず、俗悪に陥らず、風致を害せず」という標語を掲げ、体育と園芸趣味の奨励を目的に園内の設備を整え、練馬城趾を保全し、武蔵野の風景を害さないことが目指された。藤田が将来を担う子供達の成長など、公共性を重視した結果、グラウンドやテニスコート、野球場、プール、温室、ぶどう園などから成る美しい園地が整備されるに至り、東京近郊のみ成らず日本を代表する近代遊園地として知られるようになった。遊園地の設計は、米国のコーネル大学において日本人として初めて造園学を修め、邦人のランドスケープ・アーキテクト第 1 号とも言われる戸野琢磨に委ねられた。戸野は、起伏に富んだこの地の特徴を活かし、高尚な風景美を特色とした遊園地の創出を試みたとしている。

当該の建築は、遊園地の敷地東南にある入口近くの練馬城趾附近、高低差のある東斜面に立地する。戸野が描いたとみられる設計図案や翌年の全面開園を控えた 1926（大正 15）年頃の刷り物（「練馬城趾豊嶋園全景」）にもそれと比定できる建物を確認できる。また、1927（昭和 2）年 1 月発行の雑誌記事には竣工後の写真が掲載されており、開園当初からの建築と確認される。

戸野は、1927（昭和 2）年 10 月の論稿で、豊島園の設計についてこの建物附近のことを軸に詳述している。具体的には、練馬城趾を構成する土塁を保全し、眺望や起伏を活かすことに苦労したこと、土塁を活かして「清楚に且つ過飾を避け」つつ、城趾を記念するという条件から英国風の造園による花園を設けたことが述べられている。当該の建物は、城趾に相応しい英国風の古城の外観とし、この花園を眺めながら休憩や食事の場として、花園の中央に設けた噴水に給水する水塔の機能を担わせつつ設計したとある。また、地下を用いるなどして、廃墟の趣を出すよう努めたことにも言及されている。すなわち、「古城の食堂」は、英国式花園と外観上も機能上も一体的に設計され、同花園の一部として風景をつくっていた。

建物は、概ね塔と平屋（西側から見ると地下部分）と大階段から構成されるが、英国風の古城の外観としてゴシックを基調とする様式が用いられている。塔の下部には尖塔アーチ、その下の平屋部分には、チューダー風の扁平な尖頭アーチによる開口が大階段の北側に 5 つ（増築によ

り現在外観から確認されるのは 4 つ)、南側の円形平面部分に 3 つ設けられ、その軒上には、胸壁が見られ、狭間が刻まれていた。なお、南側の胸壁は、4 つの半円が稜堡状に迫り出した先に設けられている。遊園地のエントランス側（東側／英国式花園と反対側）においては、これらが大階段と相俟って、軽快且つ変化のある立面を作り出している。また、塔の頂部が不規則な凹凸で象られているのは、廃城を印象づける工夫と見られる。このように城郭の廃墟を模した建築は、英国などで流行したゴシック・リヴァイヴァルやロマン主義といった過去への憧憬を孕むもので、戸野もそうした意味を、練馬城趾を偲ぶ行為に重ねようとしたと考えられる。

起伏に富む敷地との関係を見ると、建物は東の低地と西の高台との間に配置され、その高低差を吸収して地形や周辺環境に馴染むように設計されている。この点は、ランドスケープ・アーキテクトを自認する戸野の考えが反映されていると捉えられる。塔が載らない平屋部分は陸屋根で、西の高台にある英国式花園に続くテラスとして機能した。ここには木造の休憩所やパーゴラが設けられ、土地がなだらかに下る東側への眺望も確保されていた。また、南側で稜堡状に迫り出した部分もテラスになっており、八角形の四阿の下で飲食できた。これらのテラスへは東側から、塔の正面に設けられた大階段で上ることが出来る。テラスの下にあって西側からは地下に見える平屋部分は、前記したように大階段の北と南にチューダー風尖頭アーチの開口を連ねているが、これらはそれぞれ英国式花園と異なる方の外部と向き合っており、建物が四方の環境と関係を持つよう巧みに設計されていることが判る。

調査を要するが、構造は 1923（大正 12）年の関東大震災後を契機に普及し始めた鉄筋コンクリート造で、外装には擬石などが用いられたと見られる。擬石も、コンクリート同様にポルトランドセメントの普及に伴って普及した人造石の一種で、当時の技術の進捗を反映している。前記したように陸屋根の屋上を全面的に採用している点、稜堡状に迫り出しや塔の 2 階に上る外階段を片持ち梁（キャンチレバー）としている点は、鉄筋コンクリート造の特徴を活かしたものと言える。また、こうした最新技術を用いることで、古城の雰囲気を良く作り出している点にも注目される。

1928（昭和 3）年以降の全景図や絵葉書には「古城ノ（の）食堂」、「古城の喫茶」、「古城の塔」等とあり、「古城」として遊園地の風景を構成する重要な存在であったと見られる。ちなみに、与謝野晶子と寛が中心になって刊行した雑誌『明星』の後身『冬柏』の 3 巻 7 号（1932 年 6 月）には、晶子作の「豊島園小景」が掲載されるが、ここには、「国王が塔の物見」、「塔に添ひたり」、「城の露台に擬したるへ用意された」など、「古城の食堂」が対象と見られる数節を認めることができる。

戦後は、喫茶、展覧会場などに使われたようだが、近年は、木馬の会事務所の役割をあてがわれ、昨年 8 月の閉園に至るまで大切に使われてきた。そのためか、凡そ 94 年が経過した現在でも、外観を見る限り、細部を含めてほぼ建設当初の様子を止めている。必要に応じた改変は見られるものの、オリジナルが遺されている割合が極めて高い遺構と見なせる。

2. 建築の価値

以上を踏まえ、改めて要点を述べれば、「古城の食堂」の価値は、以下 4 点に集約される。

1）我が国を代表する近代遊園地豊島園の記憶を継承する価値

明治末から大正にかけて、都市への人口が集中し、大都市と郊外を結ぶ私鉄が相次いで敷設され、環境の良い郊外が注目された。特に工業化が進み、環境悪化が進んだ大都市では、英国で提唱された田園都市構想に刺激され、空気や水が清澄な郊外での居住や休息が推奨された。そうした背景があり、数多くの遊園地が郊外の電鉄沿線に開設される。阪神沿線の香櫨園や箕面有馬電軌による宝塚新温泉、田園都市株式会社による多摩川園、京王電鉄の京王閣多摩川原遊園などとともに、豊島園は当時の遊園地を代表する存在である。

豊島園を開設した藤田好三郎は、体育と園芸、城趾という土地の由緒を重視したが、これには、その当時の郊外生活の理想が反映されていたと見なせる。1914（大正 3）年創刊の阪神電鉄の沿線誌『郊外生活』は、衛生、園芸、郷土研究を軸に郊外での生活文化を豊かにする主旨を説いているし、運動と園芸は、藤田自身の趣味でもあった。当時の遊園地は、郊外に移住した人々や、郊外に遊ぶ人々が求めるライフスタイルに応じた施設として成立している。豊島園の開発や園のあり方は、東京における大正時代前後のこうした都市生活の変化、都市域が郊外へと広がっていく大きな動きを象徴するものと捉えられる。すなわち、その重要な要素として設けられた当該の建築は、東京のみならず、日本の都市が近代化していく歴史を考察する上で、貴重な遺構である。前記したような戦前に開設された遊園地は、1990 年代末からのデフレ不況の影響で、相次いで閉園に追い込まれた結果、目立った遺構は残されていない中、この建物は、外観を見る限り、細部まで建設当時の形状をほぼそのままに止めており、希少性も高い。

また、豊島園内では、開園当初から今日まで遺されている唯一の遺構であり、戦前戦後を通じて東京市民あるいは都民に親しまれてきた遊園地そのものの記憶と、与謝野晶子を含め、ここに遊んだ多くの人々の思い出を繋ぎ止める上で不可欠な存在である。

2）邦人のランドスケープ・アーキテクト第 1 号とされる戸野琢磨の作品としての価値

豊島園の設計者である戸野琢磨（1891- 1985）は、日本人のランドスケープ・アーキテクト第 1 号と言われる。戸野は、北海道大学農学部を経て米国 N.Y.のコーネル大学で大学院まで進み、造園分野では、1921 年、日本人で初めて修士の学位（M.L.D.）を取得しており、翌年にはヨーロッパ研修に派遣された。1923（大正 12）年に帰国後は、東京市公園課嘱託を務めつつ、日本で初めての独立した造園専門の設計事務所を構え、設計活動を行った。著述も多数あり、早稲田大学建築科や東京農業大学で教鞭を執るなど教育面における貢献も大きい。「日本の国土をよりよく、美しくする」ことを使命と捉え、それを実践することに努めたという。

戸野は、豊島園以降も、千里山遊園、枚方遊園地、谷津遊園地などの遊園地の設計に関わるが、田原邸や植村邸（現桜丘すみれば自然庭園公園）など私邸の庭園も数多く手掛けている。呉羽紡績大門工場などの工場造園のほか、東林間都市分譲計画など都市計画に近いものなど戦前から多岐に亘る活躍が見られる。また、海外では、米国だけでも 40 以上の作品を手掛けており、高名なポートランドの日本庭園（米国オレゴン州）を最初に設計したのが戸野である。

著名建築家との関わりも少なくない。下村正太郎邸（京都市）や豊郷尋常高等小学校（近江八幡市）は W.M.ヴォーリズ、石橋徳次郎邸（久留米市）は松田軍平、資生堂アートハウス（掛川市）は谷口吉生の設計だが、戸野はこれらの建築に対応する庭園を手掛けている。

このように、戸野琢磨は、欧米に学び、近現代の日本の造園を発展させた邦人造園家あるいはランドスケープ・アーキテクトの先駆者として歴史的に重要な人物である。「古城の食堂」は、戸野が留学後に日本国内で手掛けた最初の実作である豊島園の重要な遺構である。また、戸野が

直接的に設計に関わったと考えられ、環境との一体化が図られているなど、ランドスケープ・アーキテクトらしい発想の反映が認められる点で貴重と言える。

3）震災後間もない鉄筋コンクリート造建築としての価値

1923（大正 12）年の関東大震災では、火災による被害も甚大で、復興にあたっては、耐震と耐火を共に満たす鉄筋コンクリート造が注目され、以降に普及が急拡大した。「古城の食堂」も震災の数年後に建設されており、そうした時代背景を反映する存在である。また、藤田好三郎がこの土地を開放して豊島園を開設するのは関東大震災が契機であり、この建物は、震災の記憶とも繋がっている。そのため、防災公園としての性格を持つ新しい公園において、意味ある記念碑たり得る。

さらに、外装材を工夫しつつも、テラスを兼ねた陸屋根や片持ち梁など、この構造形式ならではの技術を用いて、古城の風情と求められる機能性を巧みに融合させた他に例を見ない建築となっており、この当時、最新技術として用いられ始めた鉄筋コンクリート造による表現の幅の広さを端的に示す遺構として、希有な価値を有している。

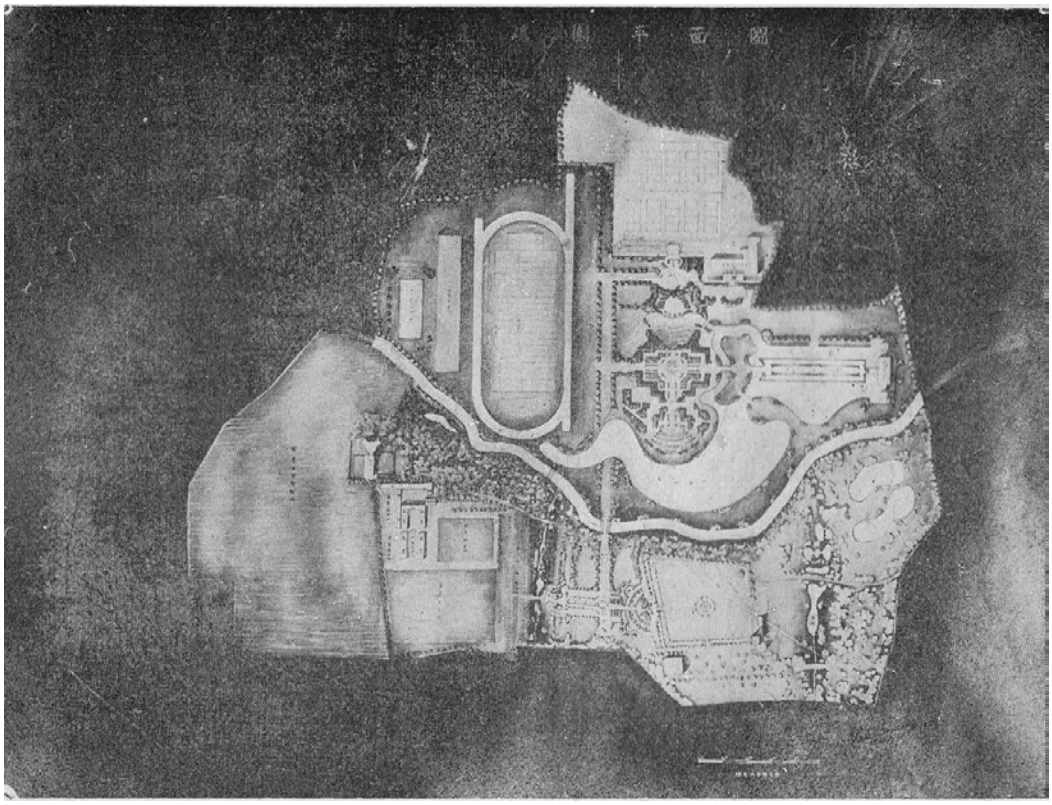
4）土地の歴史を継承する価値

藤田好三郎は、この地の風致を害しないことを重視した遊園地開発を試み、それを受けた戸野琢磨は、練馬城趾の保全を念頭に、英国式花園と「古城の食堂」等の設計を行った。すなわち、この建物は、この地の歴史を継承しようとした藤田や戸野の意志を今に伝えるものと言える。現在、失われている周辺の風致や地形は少なくないが、新しい公園において城趾の保全とともに当時の風景を幾許かでも復元して、この地の歴史性を継承しようとするならば、こうした意味を持つ当該の建築の保存・活用を前提にした計画が必然であり、前記した遊園地の記憶を保つことと併せて、土地の歴史性を継承する上で不可欠と考えられる。

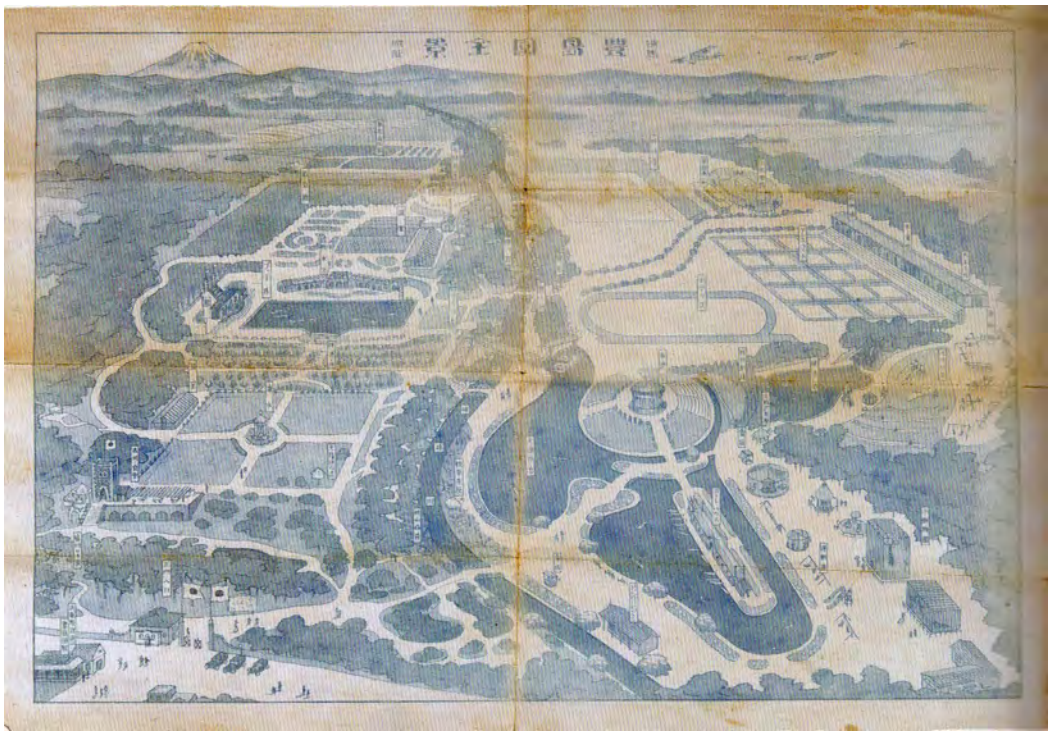
主な参考文献：

・「練馬城趾豊嶋園全景」1926 年頃
・里見盈吉「遊園地の意義及び性質」建築世界 21 巻 1 号 1927 年 1 月
・戸野琢磨「遊園地としての豊島園」庭園と風景 9 巻 10 号 1927 年 10 月
・林有一「武蔵野の進化を物語る豊島園」武蔵野 11（5）1928 年 5 月
・石井勇義 編『綜合園芸大系 第 11 篇 最新造園法 洋庭・公園・遊園地篇』誠文堂 1931 年
・戸野琢磨『造園の計画と設計』鹿島出版会 1970 年
・金井格「名誉会員 戸野琢磨先生をしのぶ」造園雑誌 49(1) 1985 年 8 月
・鈴木誠「戸野琢磨 ： 日本の"ランドスケープ・アーキテクト"第 1 号」ランドスケープ研究 ： 日本造園学会誌 60(4) 1997 年 3 月
・安野彰 篠野志郎「明治・大正・昭和初期における東京近郊の遊園地の実態 ： 都市娯楽施設の史的研究」日本建築学会計画系論文集 64(518) 1999 年 4 月
・練馬区立石神井公園ふるさと文化館編『夢の黄金郷「遊園地」～思い出のメリーゴーランド～』練馬区立石神井公園ふるさと文化館 2016 年
・平井聖編『日本の建築文化事典』丸善出版 2020 年

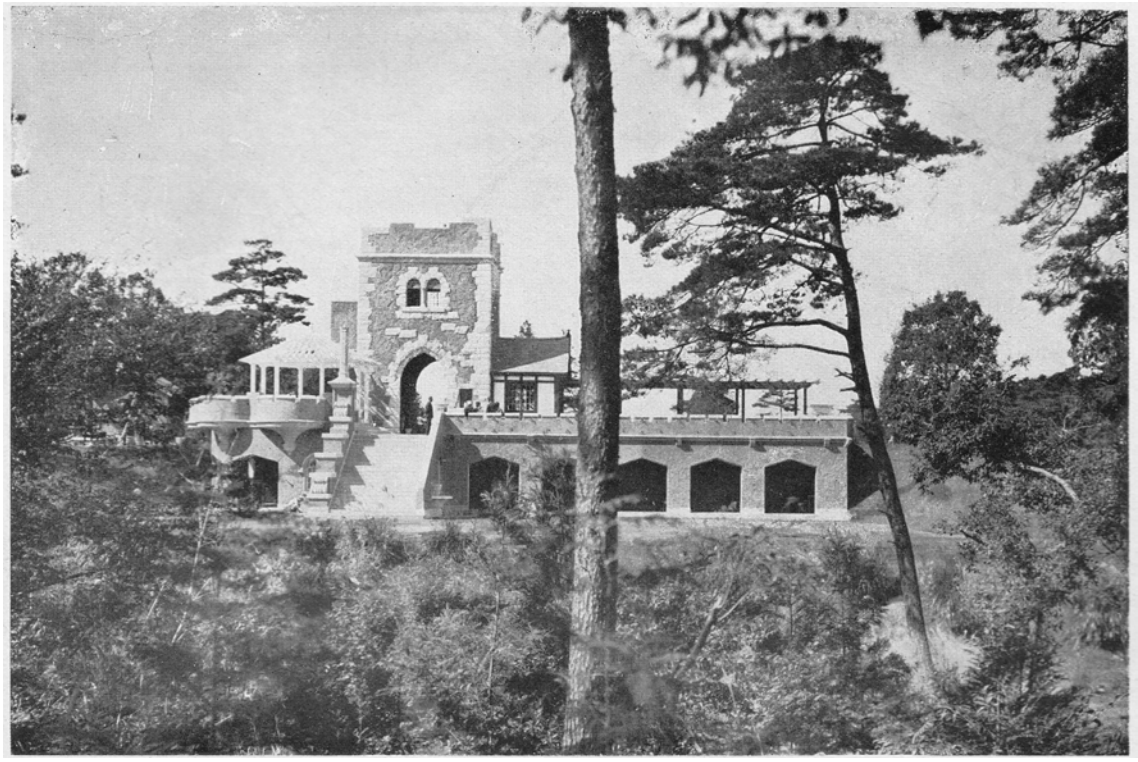
参考資料



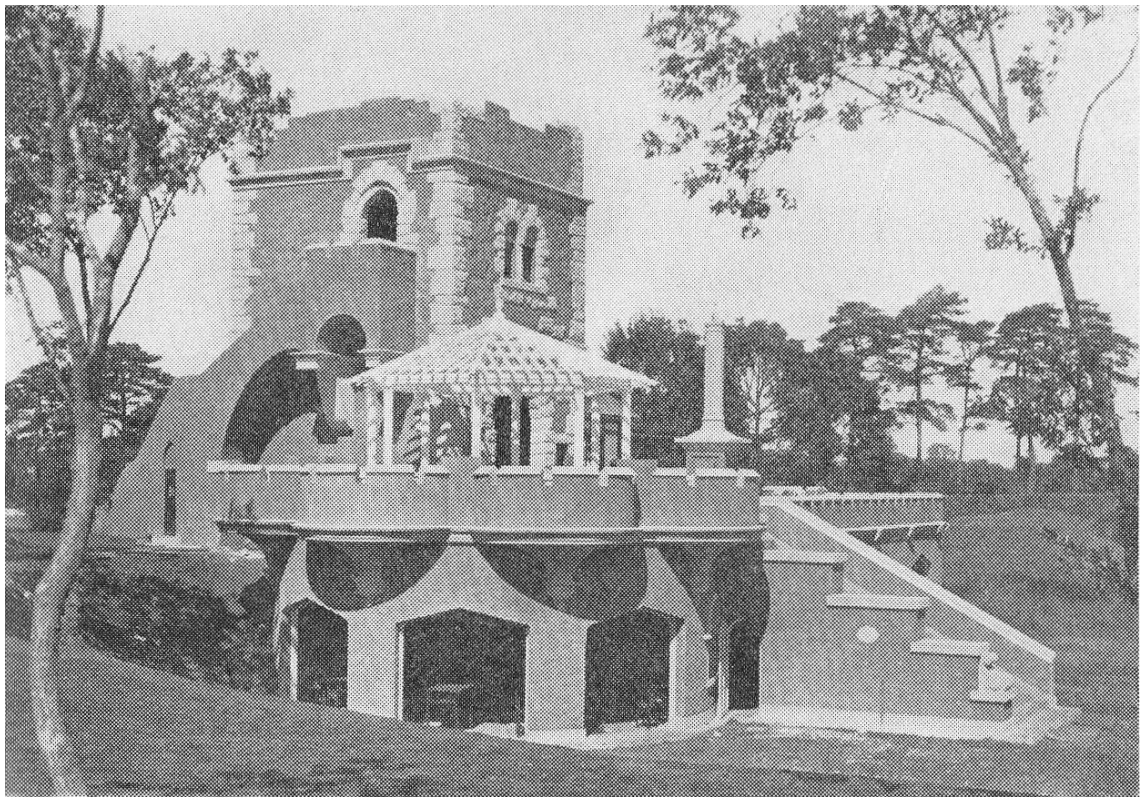
1　練馬豊嶋園平面図（『最新造園法』より）



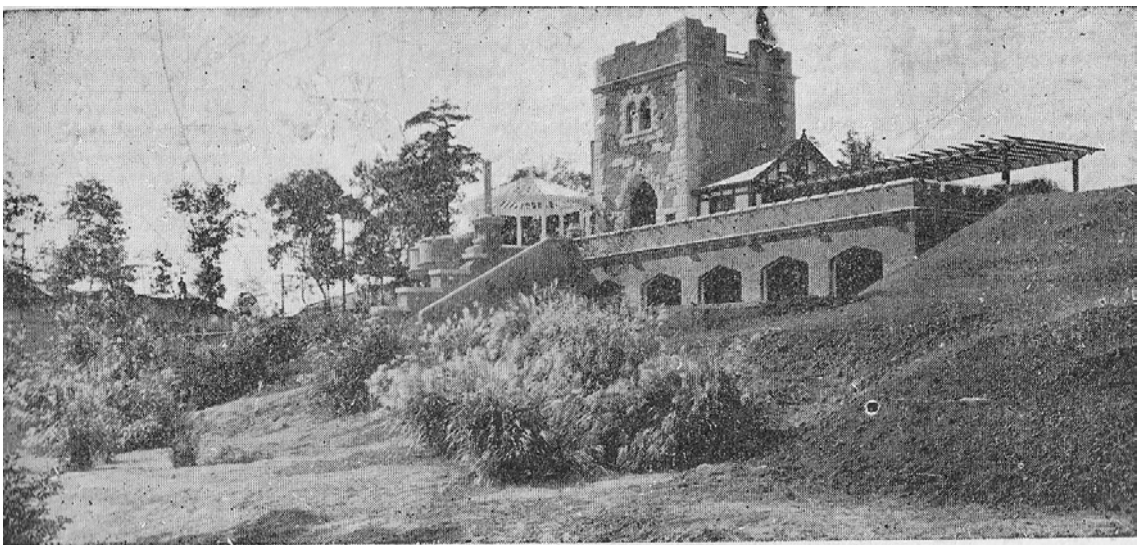
2　練馬城趾豊島園全景　昭和初期（『夢の黄金郷「遊園地」～思い出のメリーゴーランド～』より）



3　東側外観（『最新造園法』より）

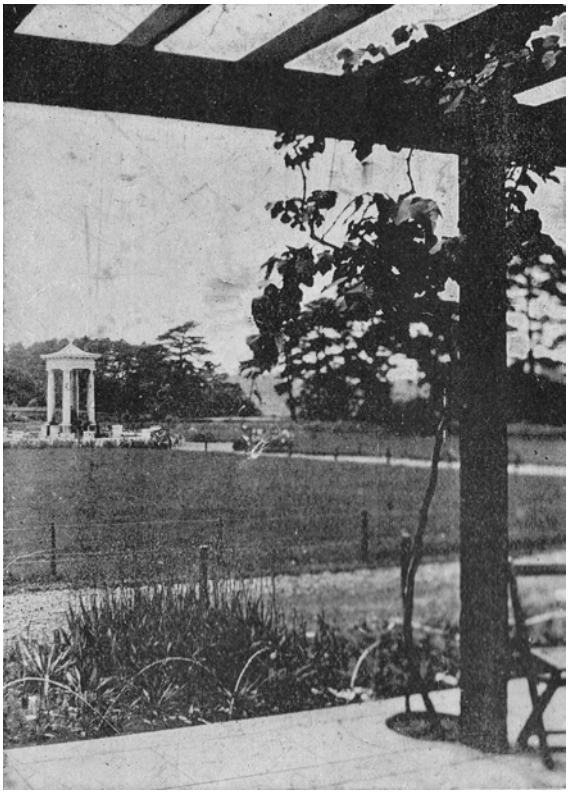


4　南東側外観（『造園の計画と設計』より）



5　北西側外観（『最新造園法』より）

6　西側（英国式花園側）外観（『最新造園法』より）



7　「古城の食堂」のテラスから英国式花園の噴水塔を望む（『最新造園法』より）

8　英国式花園の噴水塔と「古城の食堂」（『夢の黄金郷「遊園地」～思い出のメリーゴーランド～』より）

9　東側外観　現状写真

10 塔と大階段　現状写真

11 南東側の稜堡状の迫り出し　現状写真

12 チューダー風の尖頭アーチ　現状写真